シーソーゲーム

朱璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シーソーゲーム

【Ｎコード】
Ｎ２２１２Ｚ

【作者名】
朱璃

【あらすじ】
天使のような顔に似合わず、喧嘩が強く口汚いミカゲ。そんなミカゲに虐げられながらも、自称親友を貫くタカマ。話していてもいつも最後はミカゲに突き落とされる。上がったり下がったり、そんな会話のシーソーゲーム。　ほぼ会話文のみで構成されています。あまりに短い話の集まりなので、大体５話一まとめでアップしていきます。

登場人物（前書き）

登場人物は増えるたびに随時追加していきます。

登場人物

ミカゲ
＊本名、早乙女魅影（さおとめみかげ）。高校2年。
＊容姿端麗、頭脳明晰、しかも家が金持ち。しかし、驚くほど口汚い毒舌王。天使の顔で悪魔のような男。
＊シスコン。
＊好き嫌いが激しい。
＊顔に似合わず喧嘩がめちゃくちゃ強い。

タカマ
＊本名、神楽坂鷹眞（かぐらざかたかま）。高校2年。
＊イケメンと呼ばれる部類には入るが、本人は気付いていない。
＊顔が濃いのを気にしている。
＊自称ミカゲの親友。ミカゲに虐げられながらも一緒にいる。
＊苦労人。

ナナセ
＊本名、早乙女七瀬。高校1年。
＊ミカゲの妹。
＊ミカゲによく似た美少女。しかし性格は似ず、誰にでも別け隔てなく優しい。が、時々黒い。常にふわふわとした笑顔で周りを和ませるが、案外策士。

1

＊先制パンチ

「ミカゲ、俺らって親友だよな」

「なぜそうなった」

「えぇっ！？」

「お前が親友ならゴキブリですら親友と呼べるね」

「ぐほぁっ！右ストレート！」

「やだな、そんなことするわけないじゃない」

「ミ、ミカゲ……」

「だって僕は左利きだよ？力が入らないでしょ」

「悪魔！」

＊屁理屈ならば負けません

「僕さ、黒い飲み物が嫌いなんだよね」
「はぁ？」
「ブラックコーヒーとか、コーラとか。もうあれ最悪」
「いや、たまたま黒かっただけだろ」
「そんなことないよ」
「ココアは飲むじゃん」
「……馬鹿？」
「何故っ！？」
「ココアは茶色でしょ」
屁理屈大王、健在でした。

＊出会い

「そういえば出会ったばっかの頃って、結構青春したよな」

「何その暑苦しい単語。気持ち悪い」

「いやいや、だって毎日一緒に上級生とか他校生相手に喧嘩してたじゃん」

「お前が勝手に付き纏ってきたんじゃないか」

「言っとくけど、あれはお前の客のが多かったんだからね！？加勢してやったんじゃん！」

「押し付けがましいな。あんまり鬱陶しいこと言うと、その無駄に凹凸（おうとつ）のついた顔、また平面にしてあげようか」

「それって腫れて平面になるってことですよね。やめて！お前のパンチ破壊力凄過ぎるから！」

「得物は何がいい？選ばせてあげるよ」

「武器！？武器使うの！？死刑宣告！？」

「やだな、人聞き悪い。で、日本刀と拳銃、どっちがいい？」

「やっぱり殺る気満々じゃん！てゆーか銃刀法にがっつり引っ掛かってるからね！？」

「些細なことだよ」

「非国民め……」

＊ソラミミ

「人って聞いたことがない単語や聞き慣れない単語があると、自分の知ってる言葉に置き換えて認識するんだってさ」

「へぇ」

「ところで昨日、深夜番組でＡＶやってたの知ってる？」

「はぁ！？公共の電波でそんなワケ……」

「そういえばさ、×××の×××が×××その性質を×××用いた×××」

「え、ちょ、何！？どんな性質！？何を用いたの！？卑猥！」

「……はぁ？」

「え？」

「僕はハドロン物理学について説明してただけだよ。何て聞こえたの？」

「ハド……？」

「変態」

「ちょっと待てえぇ！さっきのＡＶの前振りはなんだったんだよ！」

「先入観ってコワイよね」

「おま、ハメたなぁあぁぁ！？」

＊妹よ

「お前、妹いたんだな」

「……なぜそれを知っている」

「ちょ、頭を掴むのやめてください！頭蓋骨粉砕する気か！？力、力入り過ぎだから！」

ぎりぎりぎりぎり。

「答える！答えるから！」

「で？」

「昨日たまたま見かけたんだよ！一緒に買い物してただろ。そっくりだったし、妹かなって。似てるはずなのに全然違ったな。可愛かったなぁ～……な、紹介してく……何やってんの！？」

「ん？この世に不要な物体を処分してやろうかと」

「机は持ち上げる物ではありません！」

「分かってる。殴るための物だよな？」

「ぜ、全然分かってねぇ～！」

2

＊出会っちゃった

「……」

「何してんだよ。お前が来たいって言ったんだろ。馬鹿みたいに口開けてないで、さっさと歩いてよ」

「いや、てゆーか……金持ちってのは知ってたけどこれは……」

「さっさと入って！ナナセが帰ってきちゃうでしょ。ナナセが帰ってくる前に去れ」

「ケチ」

「家に連れてきてやっただけでも最大限の譲歩だよ。感謝してよね」

「お兄ちゃん？」

「！」

「お家の前で何してるの？あ、お友達？」

ぶぉんっ！

「いってぇ！」

小柄な体型をものともせず、ミカゲは俺をぶん投げた。

「気のせいだよ、ナナセ。何かいた？僕には見えなかったけど」

「そう？」

そう？って妹さん！天然ですか！？

「ちょっと待て！俺ら親友だろ、ミカゲ！」

おいこら、舌打ちをするな。

妹さんは俺とミカゲを交互に見ると、くいっと首を傾げた。やべ、くそ可愛い。あ、やだ、ミカゲ様が拳握り締めてる。

「仲良しなんですねぇ」

今までのやり取り見てました！？

やっぱり妹さんは天然らしい。

＊箱庭

なんだかんだと、結局タカマはナナセと知り合った。こんな時ばかり運のいい男だ。

「せっかく女子校に入れたのに。お前のせいで台無し」

「妹の出会いを潰してたのか……」

「出会い？僕が潰したのは、妹に近付く輩の人生だけだよ」

「そっちの方が酷いわっ！」

俺も潰されるのか……とぶつぶつ呟いているタカマをスルーする。

「妹がいることぐらい教えてくれたっていいだろ！親友なのに！」

だって……ねぇ？

大切な妹と親友（仮）がくっついちゃったら、僕が入る隙が無くなっちゃうじゃない。

「もう知ったからいいでしょ。はい、この話は終わり」

「ほんっとひでぇ！」

薄情者！と喚くタカマは無視。

妹との時間、タカマとの時間。どっちも失いたくない。不本意だけど、心地いい。

今はまだ、この狭い世界にいたいんだ。

＊お前が言えって言ったのに

「うちの妹は確かに可愛いけどね。具体的にどこが好きなのか、愛を語ってみてよ。じゃないと片思いすら認めない」

「片思いすら認めてくんないのか……。あ、愛か。そうだな～、可愛くて優しくて、あのふわっとした笑顔がなんとも言えないよな。たまに見せる恥じらった表情とかもう、辛抱たまらんって言うか」

「タカマ……」

「な、なんだよ」

「変態だね」

「んなっ！」

「あ、言い忘れてたけどさ」

「？」

「僕、愛を語る男は嫌いなんだよね」

「！！」

お前が言えって言ったんだろーが！

＊最低条件

「てゆーかさ、もしナナセちゃんが行き遅れたらどうすんだよ？お前のせいだぞ」

「いんじゃない？僕が養っていくよ。子供は養子を貰えばいいし、父の会社を継ぐからお金は苦労させないし」

「嫁にやろうという意志は微塵も無いのか！？」

「無いね。少なくともナナセをやってもいいと納得させる奴は、今までの人生ではいなかった」

「じゃあ、どういう奴ならいいんだよ？」

「僕より頭が良くて顔が良くて喧嘩が強くて」

「すでにそこでハードル高いですね。てゆーかまだあるのか」

「僕の言うことには絶対服従。反抗心という言葉が欠片も無く、僕

が黒と言ったら白も黒になる……そんな奴じゃないと許せないね」

「……それって奴隷ですよねー」

＊結論

「ま、つまり僕より似合う男はいないってことだね」

「うわ、無理矢理まとめやがった」

「まとめ『やがった』？」

「ひぃっ！ごめんなさいお兄様！」

「……お兄様？」

結局死亡フラグでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2212z/

シーソーゲーム

2011年12月7日23時54分発行